



トゥール・ポワティエ間の戦いの「神話化」と8世紀 フランク王国における対外認識

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-12-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 津田, 拓郎 メールアドレス: 所属:
URL	https://hokkyodai.repo.nii.ac.jp/records/8241

トゥール・ポワティエ間の戦いの「神話化」と 8世紀フランク王国における対外認識

津 田 拓 郎

はじめに

本稿は、メロヴィング朝フランク王国の宮宰カール・マルテルがイスラーム勢力を撃退したトゥール・ポワティエ間の戦いの意義を考察し、その「神話化」¹⁾の過程をたどることで、フランク王国、とりわけ宮廷周辺における対外認識のあり方とその変容を探り、当時の西ユーラシア世界におけるフランク王国の位置づけを考察する際の1つの手がかりを提示しようと試みるものである。

一般に732年に起こったとされるこの戦い²⁾について、エドワード・ギボンが「[トゥール・ポワティエでアラブ軍が勝利を収めていたら] 今頃はオクスフォードの学位試験ではコーランが教授され、この大学の説教壇は割礼を受けた国民にマホメットの啓示した神聖な真理を論証する場になっただろう」と述べ³⁾、この戦いをイスラーム勢力の征服からヨーロッパを守った決定的な勝利であるとみなしたことはよく知られている。そして、こうしたギボンの評価が、現在さまざまな形で否定されていることもまた周知の事実であろう。本稿第1章では近年の研究文献に見られるトゥール・ポワティエ間の戦いに対するさまざまな評価を概観し、この戦いの歴史上の意義を考える際の諸論点をまとめていく。

続く第2章以降で扱われるのは、この戦いのイメージの「神話化」の問題である。カロリング期における「記憶」の研究としては、近年ルイ敬虔帝時代における「シャルルマーニュ像に関す

-
- 1) トゥール・ポワティエ間の戦いのイメージの「神話化」については、すでにノンの重要な研究がある、U. Nonn, *Die Schlacht bei Poitiers 732. Probleme historischer Urteilsbildung*, R. Schieffer (ed.), *Beiträge zur Geschichte des Regnum Francorum Referate beim Wissenschaftlichen Colloquium zum 75. Geburtstag von Eugen Ewig am 28. Mai 1988*, Sigmaringen, 1990, pp. 37-56. F. Micheau and P. Sénac, *La bataille Poitiers, de la réalité au mythe*, M. Arkoun (ed.), *Histoire de l'islam et des musulmans en France du Moyen Âge à nos jours*, 2006, pp. 7-15 は主として13世紀の『フランス大年代記』以降に起こる「神話化」を問題としている。本稿ではこれらの先行研究における用法を踏襲し、「神話化」という語を、「トゥール・ポワティエ間の戦いの記憶が時代を経るにつれて大きく変化し、理想化を伴って定着していく現象」として用いる。
 - 2) この戦いが起こった年は一般に西暦732年とされているが、733年、734年とする説もあり、議論は続いている。また、戦いが起こった正確な場所についても確定的な結論は得られていない。これらの問題については、E. Rotter, *Abendland und Sarazenen. Das okzidentale Araberbild und seine Entstehung im Frühmittelalter*, Berlin - New York, 1986, pp. 223f.; R. Collins, *The Arab Conquest of Spain. 710-797*, Cambridge - Oxford, 1989, pp. 90f.; P. Fouracre, *The Age of Charles Martel*, Harlow, 2000, pp. 87f.; P. Sénac, *Charlemagne et Mahomet. En Espagne (VIIIe-IXe siècles)*, Paris, 2015, pp. 78f.
 - 3) エドワード・ギボン (中野好之訳) 『ローマ帝国衰亡史』第Ⅸ巻、筑摩書房、1992年、第52章、164頁。

る記憶の管理」というトピックが注目を集めている⁴⁾。ルイ敬虔帝時代には、「暴君」のごときイメージを含むさまざまなシャルルマーニュ像が競合していたが、最終的にアインハルトが『カール大帝伝』で描いたような「模範的君主」としてのシャルルマーニュ像が公式の地位を獲得し、その後すぐにこうしたイメージが宮廷主導で王国中に広められた結果、シャルル禿頭王時代にはすでに公式版以外のシャルルマーニュ像は現れなくなるというのである。中世盛期以降におけるシャルルマーニュの理想化・神話化というテーマは古くから関心を集めてきたものであるが、すでに彼の死後1-2世代の間にこうした動きが進んでいるという点は、きわめて重要な指摘である。我々がカロリング期（特に後期）の史料から得ているシャルルマーニュ像は、すでに実像と乖離している可能性が高いのである。本稿ではこうした研究動向の成果を摂取しつつ、さらにその2世代前のカール・マルテルの事績、とりわけトゥール・ポワティエ間の戦いのイメージの「神話化」を扱うこととなる。シャルルマーニュ像の「神話化」研究においては、特定の人々の意図に基づく「記憶の管理」が強調されていたが、トゥール・ポワティエ間の戦いの「神話化」では、情報不足や情報伝達の際の誤解、さらには偶然的要素も重要な役割を果たしていた可能性が高い。この事例は、先行研究が明らかにした「神話化」とはまた異なった形のモデルケースを提示してくれる。

こうした点を考えるなかで浮かび上がってくるのが、初期中世西欧における世界認識の問題である。西欧におけるイスラーム認識については一定の研究の蓄積があるが、多くの場合第1回十字軍以前の時代は一括して扱われがちであり、初期中世において進展したイスラーム認識の変化が議論の俎上にあがることはなかった⁵⁾。他方で、1-2世代という比較的短期間で進展していく「神話化」の過程を分析する作業からは、そうした過程と密接な関係にあるイスラーム認識の変化もまた浮かび上がってくる。本稿では、カール・マルテルやその周辺の人々が、トゥール・ポワティエ間で戦った相手であるイスラーム勢力をどのような存在として認識していたのかを考察するとともに、西欧におけるイスラーム勢力に対する認識がその後どのように変化していったのかを、この戦いの「神話化」をたどるなかで跡づけていきたい。こうした作業の結果、8世紀の西ユーラシア世界におけるフランク王国の位置づけについても新たな知見を加えることが可能となるであろう。

第1章 トゥール・ポワティエ間の戦いをめぐる評価の変遷

トゥール・ポワティエ間の戦いを伝える史料のうち、戦いに近い時期に作成されたものはそれほど多くはない。フランク王国内で成立した史料としては、いわゆる『フレデガリウス年代記続編』がもっとも詳細な情報を伝えているほか⁶⁾、8世紀前半の2つの聖人伝⁷⁾、さらにはいくつかの小年代記⁸⁾にもこの戦いへの言及が見られる。9世紀初頭にアキテーヌでまとめられた『モワサク年代記』は、基本的に既存の史料を寄せ集めたものと考えられているが、トゥール・ポワティエ間の戦いを伝える部分は他の史料で知られていない内容を含んでおり、同時代に近い情

4) こうした動向については、M. Tischler, *Karl der Grosse in der Erinnerung*, F. Pohle (ed.), *Karl der Grosse. Ort der Macht - Essays*, Dresden, 2014, pp. 408-417.

5) 中世初期をも対象とするイスラーム認識研究としては以下のものをあげることができる。Rotter, *Abendland und Sarazenen*, J. V. Tolan, *Saracens. Islam in the Medieval European Imagination*, New York, 2002; H.-W. Goetz, *Die Wahrnehmung anderer Religionen und christlich-abendländisches Selbstverständnis im frühen und hohen Mittelalter (5.-12. Jahrhundert)*, Berlin, 2013.

報源に基づいている可能性が高い⁹⁾。また、8世紀中頃にイスラーム支配下のスペイン（以下「アンダルス」と表記）で成立したと考えられる『モサラベ年代記』には、この戦いに関するもつとも詳細な叙述が見られる¹⁰⁾。ペーダ『イングランド人の教会史』第5章もサラセン人のフランク侵入に言及するものの、これがトゥール・ポワティエ間の戦いを指すのかどうかについては意見が分かれている¹¹⁾。他方で、8世紀までのアラビア語史料にはこの戦いへの言及は一切現れず、9世紀以降の史料においても簡潔に言及されるにとどまっております、イスラーム世界内部にお

- 6) B. Krusch, *Fredegarii et aliorum chronica, MGH Scriptores rerum merovingicarum 2*, Hannover, 1888, c. 13, p. 175. この史料は642年までをカバーするいわゆる『フレデガリウス年代記』の続編として、1) 736年まで、2) 751年まで、3) 768年までの3段階を経て書き継がれたと考えられてきた。1) の前半部分 (c. 1-c. 10) は、727年に成立した『フランク人の史書』のB版 (アウストラシア版) からの抜粋に基づいており、さしあたりは『フランク人の史書』の続編として逸名のアウストラシア人によって作成され、その後カール・マルテルの異母兄弟たる伯キルデブラントの下で2) の部分が、キルデブラントの息子ニーベルングの下で3) の部分がそれぞれ作成されたというのが通説である、W. Levison and H. Löwe (eds.), *Deutschlands Geschichtsquellen im Mittelalter. Vorzeit und Karolinger I*, Weimar, 1952, pp. 115f.; W. Levison and H. Löwe (eds.), *Deutschlands Geschichtsquellen im Mittelalter. Vorzeit und Karolinger II*, Weimar, 1953, pp. 161f. W. Hadrill, *The Fourth Book of the Chronicle of Fredegar with its Continuations*, London, 1960, pp. xxv-xxvii. 『フランク人の史書』については、橋本龍幸「『フランク史書』 *Liber Historiae Francorum* (訳注)」、『人間文化：愛知学院大学人間文化研究所紀要』27、2012年、155-176頁。それに対し、コリンズは、MGH版に見られるような形で『フレデガリウス年代記』に単純に『続編』を結合した写本は一切伝存していないこと、『続編』が結合した写本では『フレデガリウス年代記』部分にも様々な形で手が加えられていることを指摘したうえで、3段階による続編作成という通説 (特に736年における断絶説) をも否定している。彼によれば、この作品は768年以降の時期に一度に行われた再構成作業の産物であり、そうした作業を行った者は『フレデガリウス年代記』の『続編』ではなく、新しい『フランク人の歴史ないし事績』 *Historia vel Gesta Francorum* を作成することを試みていたのであった、R. Collins, *Die Fredegar-Chroniken*, Hannover, 2007, pp. 82-96. コリンズの見解は一定の説得力を持っており、735年頃までの記述内容に同時代の叙述としては正確性を欠いているものが散見されるとの指摘 (*ibid.*, pp. 93f.) も併せて考えるなら、従来説のように第13章 (本稿8頁) の記述が確実に736年以前に (= 第一の継続作業に) 由来すると考えることはできなくなったとって良い。他方で、これまでの研究者により指摘されてきた、727-768年までの部分に見られる複数の著者の関与 (文体の変化) の痕跡について、コリンズは詳論を避けており、彼自身『フランク人の歴史ないし事績』全体の作成 (= 継続部分の執筆および既存の部分の再構成) が一人のみの人物によって行われたとは考えていない様子である。従って、コリンズが想定する768年以降の全体の再構成作業以前に、キルデブラント・ニーベルング親子の指揮下で様々な人物が執筆に関与していたと考えることもまた可能であるといえる。本稿の議論にとって重要な第13章の記述は、遅くともキルデブラントの没年と考えられる751年頃までには成立していた可能性が高いと考えて良いだろう。現在までコリンズによる新版の刊行は実現していないため、本稿ではクルシュ版を用い、さしあたり『フレデガリウス年代記続編』という呼称も用い続けることとする。
- 7) オルレアン司教エウケリウス (†738) の伝記では、「イシュマエル人」のアキテースへの侵攻とカール・マルテルによる撃退が簡潔に述べられ、その後、エウケリウスがカールに司教座を追放された経緯が描かれている、B. Krusch (ed.), *Passiones vitaeque sanctorum aevi Merovingici (V)*, *MGH Scriptores rerum Merovingicarum 7*, Hannover, 1920, pp. 41-53, c. 8, p. 49f. リモージュ近郊のワラクトゥス修道院長パルドゥルス (†737) の伝記では、「イシュマエル人」によるポワティエ攻撃とカール・マルテルの彼らへの勝利が簡潔に述べられた後、前者が撤退途中に修道院や教会を焼き払ったこと、パルドゥルスの修道院は彼の祈りにより奇跡的に被害に遭わなかったことが描かれている、*ibid.*, pp. 19-40, c. 15, pp. 33f. とともに聖人の死後まもなく成立したと考えられているこれらの史料については、Levison and Löwe (eds.), *Deutschlands Geschichtsquellen II*, p. 168.

いてはこの戦いはそれほど大きな反響を呼ばなかったとの印象が生まれている¹²⁾。

さて、「はじめに」で述べたように、トゥール・ポワティエ間の戦いを、「拡大を続けるイスラーム勢力からヨーロッパを守った歴史的勝利」のように描くギボンの見解を受け入れる研究者は現在ではほとんど見られなくなったものの¹³⁾、ギボン説を否定する際の強調点の置き方は論者ごとに異なっている。以下では近年の概説書や研究文献に見られるこの戦いへの評価を概観するなかで浮かび上がってくる、いくつかの論点を確認していきたい。

ところで、邦語・欧語を問わず数多くの概説や研究文献がこの戦いに言及するものの、近年は

- 8) 「732年。カールが10月にサラセン人と戦った」732. *Karolus bellum habuit contra Saracinos in mense Octabri* と伝えるのはサンタマン年代記、ティリー年代記（「10月に」の文言なし）、ロップ年代記（「10月に」の文言なし）、プー年代記（「土曜日に」 *die sabbato* と付加）、「732年。カールがポワティエ（近郊）で土曜日にサラセン人と戦った」732. *Karolus pugnavit contra Saracinos die sabbato ad Pectavis* と伝えるのはロルシュ年代記、アレマニア年代記、ナザレ年代記、モーゼル年代記である。G. Pertz (ed.), *Annales et chronica aevi Carolini, MGH Scriptores I*, Hannover, 1826, pp. 8f, pp. 24f. これらの小年代記群は復活祭表への書き込みに由来するもので、ある程度同時代的に書き継がれてきたものであるというのが長い間の通説であった、Levison and Löwe (eds.), *Deutschlands Geschichtsquellen II*, pp. 180-192. 近年、R. McKitterick, *History and Memory in the Carolingian World*, Cambridge, 2004, pp. 86-111 はこうした通説を一部批判しているが、この問題についてはいまだ決着がついていない。
- 9) 732年の部分で、*rex spaniae* たるアブド・アッ・ラフマーンと「サラセン人」のアキテーヌ侵攻、アキテーヌ公ウードによる反攻と敗北、ウードによるカール・マルテルへの支援要請、ポワティエ周辺でのカール軍・イスラーム軍の戦いと前者の勝利、アブド・アッ・ラフマーンの戦死が伝えられている。G. Pertz (ed.), *Annales et chronica aevi Carolini, MGH Scriptores I*, Hannover 1826, p. 291; W. Kettemann, *Subsidia Anianensia. Überlieferungs- und textgeschichtliche Untersuchungen zur Geschichte Witiza-Benedikts, seines Klosters Aniane und zur sogenannten «anianischen Reform»*, Diss. Duisburg, 2000, p. 25. この史料については、ケッテマンの研究に加えて、Levison and Löwe (eds.), *Deutschlands Geschichtsquellen II*, pp. 265f. を参照。
- 10) J. E. L. Pereira (ed. and trans.), *La Crónica mozárabe de 754. Edición crítica y traducción*, Zaragoza, 1980, c. 80, pp. 98-101. 以下で述べるように、この史料には、アンダルス総督に反抗していたベルベル人有力者とウードの同盟など、フランク史料に見られない貴重な情報が含まれている。英訳は K. B. Wolf, *Conquerors and Chroniclers of Early Medieval Spain (2nd ed.)*, Liverpool, 1999, pp. 111-160. 邦訳は、安達かおり『イスラム・スペインとモサラベ』彩流社、1997年、115 - 208頁。この史料については Collins, *The Arab Conquest of Spain*, pp. 26f; Wolf, *Conquerors and Chroniclers*, pp. 26-42. 成立地や成立事情について確定的な結論は得られていないものの、ムスリムの行政に何らかの形で関与した、キリスト教聖職者の手によって、754年以降に成立したと考えられている。『754年年代記』などとも呼ばれるが、本稿では『モサラベ年代記』という呼称を採用する。
- 11) 「主の受肉から729年…当時、サラセン人の激烈な害毒はガリアをみじめな損害によって荒廃させたが、彼ら自身は間もなくその国で不信仰にふさわしい罰を蒙った」*Anno dominicae incarnationis DCCXXVIII [...] Quo tempore grauissima Sarracenorum lues Gallias misera caede uastabat, et ipsi non multo post in eadem provincia dignas suae perfidiae poenas luebant*. B. Colgrave and R. A. B. Mynors (eds.), *Bede's Ecclesiastical History of the English People*, Oxford, 1969, p. 556, ll. 26-36 (訳文は、ベータ(長友栄三郎訳)『イギリス教会史』、創文社、1965年、第5巻第23章、447頁に基づきつつ一部を修正した)。比較的多くの論者がこの記述をトゥール・ポワティエ間の戦いに結びつけているのに対し、Collins, *The Arab Conquest of Spain*, pp. 87f. は720年代にイスラーム勢力による攻撃がブルグンド中心部にまで及んだことを伝え聞いた結果の記述だと考えており、Tolan, *Saracens*, pp. 74f. は721年トゥールーズの戦いを指すとの見解を示している。『教会史』は731年頃成立と考えられているため、この記述がトゥール・ポワティエ間の戦いを指すという場合は、その成立後にベータ(†735) ないしは他の人物によって加筆されたということになろう。

この戦いに焦点を絞って詳細な史料分析を行う研究はほとんど現れていない。唯一の例外といって良いのは、1990年のウルリッヒ・ノンによる研究である。彼は同時代史料から出発し、中世全体の歴史叙述を概観して、中世を通じて737年のナルボンヌ近郊での戦いもまた賞賛され続けたということを描き、カール・マルテルの一連の対イスラーム戦のなかで、トゥール・ポワティエ間の戦いの意義のみを高く見積もるような見方は誤りであるとの結論を示した¹⁴⁾。8世紀前半のイスラーム勢力のフランク侵入をまとめた表1を見れば明らかなように、実際には732年以外にも戦闘は行われており、721年のトゥールーズの戦い、737年のナルボンヌ近郊での戦いにおいてもアンダルス総督が戦死しているのである。セナックも、後の反響の大きさと、同時代における意義を混同してはならないとして、732年以外にもいくつか重要な戦闘があったということを強調している¹⁵⁾。また、『フレデガリウス年代記続編』はカール・マルテルが敵の軍隊に壊滅的被害を与えたかのような叙述を行っているが、『モサラベ年代記』は総督こそ戦死したものの、軍の大半が撤退に成功したことを伝えており、『パルドゥルス伝』でも撤退途中で略奪・破壊を行うイスラーム軍の存在が描かれていて、この戦いにおけるイスラーム側の被害を過大評価することはできない。

さて、ノンはトゥール・ポワティエ間の戦いの意義のみを強調する見解を批判したのではあるが、カール・マルテル（およびアキテーヌ公ウード）の対イスラーム戦における何度かの勝利の意義は全く疑っていない。他方で、イスラーム勢力の侵入が止んだ理由として、カール・マルテルの勝利よりもイスラーム側の内紛を強調する論者も存在する¹⁶⁾。表1からも明らかなようにイスラーム勢力は、何度もガリアへの侵入を繰り返しており、721年、732年、737年の戦いでの総督の戦死が活動の断絶をもたらしているわけではないのである。

- 12) トゥール・ポワティエ間の戦いを伝えるアラビア語史料については、Collins, *The Arab Conquest of Spain*, pp. 90f.; Sénac, *Charlemagne et Mahomet*, pp. 67-70. この戦いを伝える最古のアラビア語史料は、エジプトの歴史家イブン・アブド・アル・ハカム（871年没）によるエジプト・アフリカ・イベリア半島征服を記述した書物である。ただしそこに見られる叙述は、総督アブド・アッ・ラフマーンが、豊かな略奪品を求めて行った2度目のフランク遠征において仲間とともに殉教したという簡潔な情報のみである。J. H. Jones (ed. and trans.), *Ibn Abd el-Hakem, History of the Conquest of Spain*, Göttingen, 1858, p. 33. その他、セナックがあげるアラビア語史料は、イブン・イザーリー、著者不明の『アンダルスの征服』*Fath al-Andalus*、イブン・アル・アスィールであるが、それらすべてがきわめて簡潔にのみこの戦いを伝えているに過ぎない。ただし『アンダルスの征服』とイブン・アル・アスィールでは、戦いが起こった場所が「殉教者の道」と呼ばれている。なお、イスラーム世界ではアッバース朝時代にならないとまとまった形の歴史叙述が現れないことを考えるなら、「同時代のアラビア語史料の不在」からイスラーム世界におけるこの戦いへの関心の不在を単純に推論することは慎むべきなのかもしれない。
- 13) ただし、高校の世界史教科書はギボン同様この戦いの意義を強調し続けている。「この頃、アラビア半島から急速に広がって地中海世界に侵入したイスラーム勢力が、フランク王国にも迫りつつあった。ウマイヤ朝時代、アラブ人のイスラーム勢力が北アフリカを西進し、イベリア半島にわたって西ゴート王国を滅ぼし（711年）、さらにピレネー山脈をこえてガリアに侵寇しようとしたのである。メロヴィング朝の宮宰カール＝マルテルは、732年トゥール・ポワティエ間の戦いでイスラーム軍を撃退し、西方キリスト教世界を外部勢力からまもった」、『詳説世界史』山川出版社、2014年、124頁。
- 14) Nonn, *Die Schlacht bei Poitiers 732*, p. 53. もっとも彼の分析は中世末で終わっており、現代の歴史叙述において737年の戦いが軽視され、トゥール・ポワティエ間の戦いだけが強調されるようになった理由は明らかにされていない。この点については、近代までを射程に入れた Micheau and Sénac, *La bataille Poitiers* が参考になるものの、十分な議論が尽くされていない。
- 15) Sénac, *Charlemagne et Mahomet*, p. 87.

表1：イスラーム勢力のガリア侵入関係の

西 暦	出 来 事
711年	イスラーム勢力がスペイン侵入。西ゴート軍を撃退
717 - 718年	イスラーム勢力によるコンスタンティノープル包囲(失敗)
720年	イスラーム勢力がナルボンヌ征服
721年	イスラーム勢力によるトゥールーズ包囲。アキテーヌ公ウードの戦勝により、イスラーム側の総督アッサムが戦死
724年	総督アンバサ率いるイスラーム軍がカルカソンヌとニームを占領
725年	総督アンバサ率いるイスラーム軍がオートン略奪
725 - 731年	イスラーム勢力のガリアでの活動に関する情報が途絶える時期。ムスリム内部の内紛により
731年	アキテーヌ公ウードと同盟していたベルベル人ムヌズが、総督アブド・アッ・ラフマーンに敗れ死亡
731年	カール・マルテル、2度にわたりアキテーヌ遠征
732年	総督アブド・アッ・ラフマーンがアキテーヌ侵入。ボルドー・ボワティエを破壊
732年(?)	トゥール・ボワティエ間の戦い。アブド・アッ・ラフマーン戦死。イスラーム軍は略奪を行いつつナルボンヌへ撤退
735年	総督アブド・アル・マリクがピレネーを越えて遠征を行うが成果なし
737年	イスラーム勢力がアヴィニョンを拠点にブルグンド・アキテーヌを攻撃
737年	カール・マルテルがアヴィニョンを占拠。ナルボンヌ包囲。スペインからの援軍として到来した総督ウマルを殺害
738年 (739年?)	イスラーム軍がプロヴァンスに侵入するも、カールの支援要請を受けて到着したリウトブランド軍を前に撤退
739年	カール・マルテルがプロヴァンス遠征。反乱していたアヴィニョンの指導者マウロントゥスに勝利
740年代～	アンダルスが内乱状態になり、イスラーム勢力のピレネー以北での活動が下火になる時期

また、イスラーム勢力のガリア侵入の意図についても、論者ごとに見解は異なっている。イスラーム勢力がフランク王国征服を目的として侵入してきたというギボン以来の伝統的イメージを基本的に維持し続ける論者が一定数見られる一方で¹⁷⁾、繰り返されるガリア侵入は基本的に略奪品目当ての遠征に過ぎないとする見解もしばしば提示されているのである¹⁸⁾。「征服目的の遠征」と「略奪品目当ての遠征」をどの程度明確に区別すべきかという問題は残るにせよ¹⁹⁾、近年はイスラーム勢力におけるガリア征服の意図を小さく見積もる見解が通説となりつつあるとあって良いだろう。

さらなる重要な論点として、この時期の一連の争いをイスラーム対キリスト教というイメージ

16) 村田靖子「ムスリムのイベリア半島征服」、堀川徹(編)『講座イスラーム世界3 — 世界に広がるイスラーム』栄光教育文化研究所、1995年、45 - 80頁、61 - 63頁；佐藤健太郎「イスラーム期のスペイン」、関哲行・立石博高・中塚次郎(編)『世界歴史大系スペイン史1 — 古代～近世 —』山川出版社、2008年、70 - 135頁、72 - 73頁；Collins, *The Arab Conquest of Spain*, pp. 89f.

17) 例えば、P. Riché, *Les Carolingiens : une famille qui fit l'Europe*, Paris, 1983, pp. 53f.; K. Ubl, *Die Karolinger. Herrscher und Reich*, München, 2014, p. 20. 上述のノンの見解もここに含まれるとあって良い。

年表と史料中の言及

モサラベ 年代記	フレデガリ ウス続編	モワサク ク年代記	小年代 記群	教皇の書	ランゴバ ルド史	カール 大帝伝	レギノ 年代記
○		○		○	○		
				○	○		○
○		○					
○		○	○	○	○		
△		○					
		○	△				

ピレネー以北への攻撃が沈静化していたと推測される

○							
	○	○	○				○
○	○	○					
○	○	○	○			○	○
○							
○	○	○					○
	○	○	○		○	○	○
					○		○
	○		○				

で捉えられるのかという問題がある。確かに、トゥール・ポワティエ間の戦いや、その他の「サラセン人」との戦いを描くラテン語史料のなかに、宗教的なコノテーションが見られることはしばしば指摘されているとおりである。例えば『フレデガリウス年代記続編』は、カール・マルテルの「サラセン人」への勝利を描く際に、「キリストの庇護を持って」彼が戦ったと述べているし、『バルドゥルフス伝』でも、この戦いの後イスラーム勢力の残党は「出会ったキリスト教徒すべてを殺害し、修道院や聖なる場所にさしかかると、それらすべてを炎で焼き払った」²⁰⁾と記

18) Fouracre, *The Age of Charles Martel*, p. 88. H. Kennedy, *The muslims in europe*, R. McKitterick (ed.), *The New Cambridge Medieval History. Vol. 2: c. 700-c. 900*, Cambridge, 1995, pp. 249-271, pp. 258f. は定期的な略奪がアンダルス支配にとって不可欠であったことを強調している。佐藤次高『世界の歴史8—イスラーム世界の興隆』中央公論新社、2008年、243-244頁は、補給路が延びきっておりガリア全土の征服は現実的ではなかったとし、寒冷で貧しいピレネー以北の地域が征服を渴望させるほど魅力的ではなかったとも指摘する。この点については、村田靖子「ムスリムのイベリア半島征服」、62-63頁も参照。事実、イスラーム勢力がピレネー以北に確立した拠点は温暖な南仏地域に集中している。

19) 参照、Sénac, *Charlemagne et Mahomet*, pp. 79f.

20) B. Krusch (ed.), *Passiones vitaeque sanctorum aevi Merovingici*, c. 15, p. 333, ll. 9f.

載している。しかし、そうした叙述から、「異なる宗教間の戦争」というイメージが同時代人にも強く意識されていたという結論を導くことは控えるべきであろう。侵入してきた敵が非キリスト教徒であるとの意識は同時代史料にもはっきりと反映されているが、「キリストの庇護」という記述自体はある種のレトリックとして対イスラーム戦以外でも頻出するものであるし、『バルドゥルフス伝』の記述も、聖人伝という史料の性格を考えれば過大評価すべきではない。そもそも、フランクの史料のなかでもっとも詳細な情報を含む『フレデガリウス年代記続編』第13章の記述には、「ガリア征服を目指して侵入してきたイスラーム勢力との一大決戦」のごとき印象は一切現れない。以下に日置雅子による邦訳を引用しよう²¹⁾。

「ちょうどこの頃、公ウードは正規に結んだ協約を遵守してはいなかった。使者からその知らせを受けたカール侯〔カール・マルテル〕は、軍隊を動かし、ロワールを渡河して公ウードを潰走させた。この年〔731年〕2度にわたって敵から掠奪した多くの戦利品を得て、彼は故郷に凱旋した。一方公ウードは、敗北して嘲笑されているのを知り、不実な民族であるサラセン人を扇動して、カール侯とフランク族への抵抗を支援させようとした。彼ら〔サラセン人〕は、アブディラーマという名の彼らの王とともに出発し、ガロンヌ河を渡ってボルドーという都市に到達した。教会を焼き払い、人々を虐殺した後、彼らはさらにポワティエに進軍した。語るも嘆かわしいことに、彼らは聖ヒラリウスの大聖堂に火を放ち、そして、至聖のマルティヌスの聖堂を破壊することを決めた。彼らに対してカール侯は勇敢に戦列を整え、戦士として彼らに突進した。キリストの庇護をもって、彼は、彼らの天幕を破壊し、突撃に急行して大殺戮を展開した。彼は、彼らの王アブディラーマを殺害し、全滅させ、軍隊を殲滅し、白兵戦を繰り広げ、そして完勝した。かくして彼は、敵に対する勝利者として凱旋した。」

この史料の記述についての分析は第3章に譲るとして、ここではカール・マルテルとアキテーヌ公ウードの対立が叙述の主軸となっており、「サラセン人」は脇役のごとき位置づけしか与えられていないということだけを確認しておこう。

なお、ここで述べられているアキテーヌ公と「サラセン人」が手を結んだという記述は、カール・マルテルと対立関係にあったアキテーヌ公を貶める目的でねつ造されたものであり、事実と

21) 日置雅子「トゥール・ポワティエ間の戦い（732年）」、歴史学研究会（編）『世界史史料5 ヨーロッパ世界の成立と膨張——17世紀まで』岩波書店、2007年、16-17頁（必要に応じて一部訳を修正した）。Krusch, *Fredegarii et aliorum chronica* c. 13, p. 175: *Per idem tempus Eodone duce a iure foederis recedente. Quo conperto per internuntios, Carlus princeps, commoto exercito, Liger fluvium transiens, ipso duce Eodone fugato, praeda multa sublata, bis eo anno ab his hostibus populata, iterum remeatur ad propria. Eodo namque dux cernens se superatum atque derisum, gentem perfidam Saracinarum ad auxilium contra Carlum principem et gentem Francorum excitavit. Egressique cum rege suo Abdirama nomine, Geromas transeunt, Burdigalensem urbem pervenerunt; ecclesiis igne concrematis, populis consumptis, usque Pectavis profecti sunt; basilica sancti Hilarii igne concremata, quod dici dolor est; ad domum beatissimi Martini evertendam destinant. Contra quos Carlus princeps audacter aciem instruit, super eosque belligerator inruit. Christo auxiliante, tentoria eorum subvertit, ad proelium stragem conterendam accurrit, interfectoque rege eorum Abdirama, prostravit, exercitum proterens, dimicavit atque devicit; sicque Victor de hostibus triumphavit.*

は異なっている²²⁾。『モワサク年代記』には、アキテーヌに侵攻してきた「サラセン人」とはじめに戦ったのが他ならぬウードであること、そして「サラセン人」に敗北したウードがカール・マルテルに支援を要請したことが描かれているのである²³⁾。この戦いについてもっとも詳細な記述を含む『モサラベ年代記』からは、さらに複雑な背景を読み取ることができる。そこでは、ムンヌズなるベルベル人²⁴⁾がフランク人と和平を結び、「スペインのサラセン人」に対する反乱を準備していたこと、総督アブド・アッ・ラフマーンによりムンヌズ他反乱首謀者が殺害されたことが述べられているのに加え、「ウードという名のフランク人の公」*dux Francorum nomine Eudo*が繰り返し行われていたイスラーム勢力の侵入を抑制する目的で自分の娘をムンヌズに嫁がせていたことも伝えられているのである²⁵⁾。キリスト教側内部にウードとカール・マルテルの対立が存在していただけでなく、イスラーム内部にもアンダルス総督に反抗する勢力があり、宗教の境を超えてウードとムンヌズは婚姻同盟を取り結んですらいいたのであった²⁶⁾。同盟勢力が壊滅し、アキテーヌに侵入してきたアブド・アッ・ラフマーンに大敗を喫したウードには、長年敵対していたカール・マルテルに頼る以外の選択肢は残されていなかった。その結果生じたのがトゥール・ポワティエ間の戦いだったのであり、ここでの勝利によって、カール・マルテルには王国南部に進出する道が開かれたのであった²⁷⁾。その後カール・マルテルは、王国南部の諸都市への攻撃・略奪を繰り返し行うのであり、この点ではイスラーム勢力と全く変わることがなかったとすらいえる²⁸⁾。現実における対立関係は「キリスト教対イスラーム」などという単純なものではなかったのである。

『モサラベ年代記』がアブド・アッ・ラフマーンと戦った勢力を2度にわたり「ヨーロッパ人」*Europenses*と呼んでいることの意義についても、慎重な判断が必要とされる。トゥール・ポワティエ間の戦いに言及する概説・研究において、この文言はしばしば「ヨーロッパ・キリスト教世界」と「アラブ・イスラーム世界」を対置する意識の表れの証拠として引用されているもの²⁹⁾、この史料はフランク人の手によるものではないため、カール・マルテルらが抱いていた意識が反映されているとは考えられない³⁰⁾。そもそも『モサラベ年代記』は、キリスト教の聖職者

22) Nonn, *Die Schlacht bei Poitiers 732*, pp. 42f.; Fouracre, *The Age of Charles Martel*, p. 84; Sénac, *Charlemagne et Mahomet*, pp. 70-80.

23) Pertz (ed.), *Annales et chronica aevi Carolini*, p. 291; Kettemann, *Subsidia Anianensia*, p. 25.

24) Pereira (ed. and trans.), *La Crónica mozárabe de 754*, c. 79, p. 96, ll. 4f. [...] *unus ex Maurorum gente nomine Munnuz* [...].

25) *Ibid.*, c. 79, pp. 96-99. ムンヌズ死亡後、ウードの娘はカリフのもとに送り届けられたとの記述も見られる。

26) コリンズは、トゥール・ポワティエ間の戦いにつながるアブド・アッ・ラフマーンのガリア侵入を、反乱勢力であるムンヌズと同盟を結んでいたウードに対する懲罰遠征であるとみなしている、Collins, *The Arab Conquest of Spain*, pp. 88f. A. Fischer, *Karl Martell. Der Beginn karolingischer Herrschaft*, Stuttgart, 2012, pp. 120f. も参照。

27) トゥール・ポワティエ間の戦いのこうした意義を強調するのは、Riché, *Les Carolingiens*, pp. 54f.; R. Schieffer, *Die Karolinger (3. Auflage)*, Stuttgart et al., 2000, p. 45; Ubl, *Die Karolinger*, p. 20; Sénac, *Charlemagne et Mahomet*, pp. 87f.; 日置雅子「トゥール・ポワティエ間の戦い(732年)」17頁。

28) こうした行いはカール・マルテルに好意的な『フレデガリウス年代記続編』においてもつつみ隠さず描かれている、Krusch, *Fredegarii et aliorum chronica*, c. 20, pp. 177f.

29) Riché, *Les Carolingiens*, p. 54. Sénac, *Charlemagne et Mahomet*, pp. 88f. は、この記述が両軍の自意識を反映したものであり、ポワティエ近郊の戦いで「ヨーロッパ」が生まれたとまで述べている。

の手によるものとはいえ、単純な反イスラーム・親キリスト教的感情に支配されているわけではない³¹⁾。この史料には基本的に親フランク人の態度は見られないのであり、そうしたことは他ならぬトゥール・ポワティエ間の戦いの叙述からも明らかなのである。ここでは、「ヨーロッパ人」（「アウストリアの民」*gens Austrie*とも呼ばれる）は、総督殺害に成功したにもかかわらず、決着戦を翌日に延期したせいで「アラブ人」の撤退を許してしまったばかりでなく、中身が空のテントが並ぶのを見て敵の大群が戦いに備えていると誤解したり、退路においてもいるはずのない敵の伏兵におびえ続けたりする愚かで臆病な存在のごとくに描かれているのである³²⁾。アンダルスに暮らすキリスト教徒たるこの史料の著者が「ヨーロッパ人」なる語を用いる際に、現代の我々がそこから読み取るような意味内容を込めていないことは明白であろう。

以上、トゥール・ポワティエ間の戦いの評価をめぐるさまざまな論点を示してきた。ここで、これらの論点すべてに最終的な結論を出すことはできないものの、1)（カール・マルテルの一連の対イスラーム戦の意義をどのように評価するにせよ）この戦いのみが決定的な重要性を持ったかのように捉える態度は不適切である、2) 宗教的対立・ヨーロッパ世界とアラブ世界の対立といった視角は、当時の情勢を観察する際に有益ではなく、同時代人においてもこうした対立軸が常に意識されていたわけではなかった、という2点は確認できたといつて良いだろう。

第2章 トゥール・ポワティエ間の戦いの「神話化」

トゥール・ポワティエ間の戦い並びにカール・マルテルの対イスラーム戦の勝利の意義が、時間を経るにつれて徐々に誇張されていくことは、多くの論者によって指摘されているものの³³⁾、このテーマを史料に基づいて掘り下げた研究としては、すでに引用したノン³⁴⁾のものが唯一であるといつて良い³⁴⁾。以下で8-9世紀にトゥール・ポワティエ間の戦いが「神話化」していく過程をたどる際には、ノンの明らかにした各時代の史料の参照関係が基本的に踏襲されることとなる。もっともノンの関心は、中世の歴史叙述において、トゥール・ポワティエ間の戦いのみならず737年ナルボンヌ近郊の戦いも賞賛され続けているという点を指摘する作業に集中しており、彼の分析においては中世のさまざまな年代記の叙述およびその情報源が列挙されているに過ぎない。それに対し本稿では、ノンが扱わなかった論点として、8-9世紀に「神話化」が生じた背景やそこから読み取れるイスラーム認識の変化をも考察していく。

まず、後のトゥール・ポワティエ間の戦いのイメージに大きな影響を与えた史料として、『教皇の書』のグレゴリウス2世伝³⁵⁾を見てみよう（なお、ここで言及されている「書簡」は現存していない）。

30) Schieffer, *Die Karolinger*, p. 45. なお、13世紀まで、ピレネー以北においてこの史料は知られておらず、この記述は長い間西欧の歴史叙述に全く影響を与えることはなかった、Nonn, *Die Schlacht bei Poitiers 732*, pp. 44f.

31) Collins, *The Arab Conquest of Spain*, p. 88; Wolf, *Conquerors and Chroniclers*, pp. 26-29.

32) Pereira (ed. and trans.), *La Crónica mozárabe de 754*, c. 80, pp. 99-101.

33) 註1であげた文献に加えて、Fouracre, *The Age of Charles Martel*, pp. 88; Fischer, *Karl Martell*, pp. 120f.

34) Nonn, *Die Schlacht bei Poitiers 732*.

35) 『教皇の書』については、C. Gantner, *Freunde Roms und Völker der Finsternis. Die päpstliche Konstruktion von Anderen im 8. und 9. Jahrhundert*, Wien - Köln - Weimar, 2014, pp. 4-50が最新の研究に基づいて概要をまとめている。

「この時、口にするのも恐ろしいハガル人が、セウタと呼ばれる場所から海を渡り、スペインに侵入して、彼らの王もろとも多数の住民を殺害した。[ハガル人は] 残った者たちをその財産もろとも支配下に置き、この属州を10年にわたって支配した。しかし11年目 [721年]、フランク人たちは総力を挙げてサラセン人たちを攻撃し、包囲された彼らを殺害した。375,000人が一日で殺害されたと、フランク人が教皇に宛てた書簡が伝えている。彼らが言うには、この戦いでフランク人側の死者は1,500人だけであった。前年に上述の人 [教皇グレゴリウス] から祝福として彼らに3つのスポンジ、すなわち教皇の祭台で用いるために供されるスポンジが贈られており、戦闘が始まる時に、アキテーヌ人の公ウッドは自身の民にそれを口にするようにと小片を分け与え、それらを分け与えられた者たちは一人も傷つくことなく、死ぬこともなかったのであった」³⁶⁾。

一読して分かるように、この部分で描かれている戦いは、トゥール・ポワティエ間の戦いではなく、721年のトゥールーズの戦いである。ここであげられている犠牲者数をそのまま信じることはできないにしても、『モサラベ年代記』や『モワサク年代記』、その他の小年代記群にも言及があるこの戦いでは、アンダルス総督アッサムが戦死したことが知られており、ウッド軍が大勝したことは疑いない³⁷⁾。なお、カール・マルテルと敵対するウッドの名声を高めることを嫌ったか、『フレデガリウス年代記続編』ではこの戦いは一切言及されていない。

さて、この『教皇の書』の記述は、『ランゴバルド人の歴史』³⁸⁾を書いたパウルス・ディアコス (725年頃から799年頃) の手によって、異なるイメージを付与されることになる。

「この時、サラセン人が、アフリカのセウタと呼ばれる場所から海を渡り、スペイン全土を侵略した。その10年後、彼らは妻や子供とともにガリアのアキテーヌ地方へと到来した。そ

36) L. Duchesne, *Le Liber Pontificalis. Texte, introduction et commentaire I*, Paris, 1886, c. 8, pp. 401f.: *Eodem tempore nec dicenda Agarenorum gens a loco qui Septem dicitur transfretantes, Spaniam ingressi, maximam occiserunt partem cum eorum rege ; reliquos omnes subdiderunt cum suis bonis et ita eandem provinciam annis possiderunt decem. Undecimo vero anno generalis facta Francorum motio contra Sarracenos circumdantes interemerunt. Trecenta enim septuaginta quinque milia uno sunt die interfecti, ut Francorum missa pontificis epistola continebat ; mille tantum quingentos ex Francis fuisse mortuos in eodem bello dixerunt, quod anno praemisso in benedictione a praedicto viro eis directis tribus spongiis quibus ad usum mense pontificis apponuntur, intra qua bellum committebatur, Eodo, Aquitanie princeps, populo suo per modicas partes tribuens ad sumendum, ex eis ne unus vulneratus est nec mortuus ex his qui participati sunt.* 引用部分中頃の *tribus spongiis quibus ad usum mense pontificis apponuntur* の部分の正確な意味内容は判然としない。*spongiis* の語がスポンジ状のパンを意味する可能性も指摘されているが、見解は分かれている。この点については、Rotter, *Abendland und Sarazenen*, pp. 214f. n. 266; Gantner, *Freunde Roms*, p. 223, n. 756. なお、以下で触れるように、グレゴリウス2世伝には、ここで引用した同時代版の他に、750年代 (740年代?) に成立したとされる別ヴァージョンも存在する。このことについては R. Davis, *The Lives of the Eighth-Century Popes*, Liverpool, 1992, pp. 1f.; Gantner, *Freunde Roms*, pp. 26f., pp. 221-226.

37) Pereira (ed. and trans.), *La Crónica mozárabe de 754*, c. 69, pp. 84f.; Pertz (ed.), *Annales et chronica aevi Carolini*, p. 290; Kettemann, *Subsidia Anianensia*, p. 27. ロルシュ年代記には「721年。ウッドがサラセン人をアキタニアから追い出した」721. *eiicit Heudo Saracinos de Aquitania* とあり、アレマニア年代記、ナザレ年代記、プトー年代記にもほぼ同様の文言が見られる。G. Pertz (ed.), *Annales et chronica aevi Carolini*, p. 7, pp. 24f.

ここに居住するためである。ところがこの時カール〔・マルテル〕は、アキタニア公ウッドと不和に陥っていた。それでも彼らは手を結び、一致団結してこのサラセン人らと戦った。フランク人たちは彼らに襲いかかり、サラセン軍375,000人を殺害した。フランク人の死者はわずかに1,500人であった。ウッドはさらに、自軍とともに彼らの砦に攻撃を加え、同じように多くを殺害して、全てを破壊した³⁹⁾。

ここでパウルスが『教皇の書』の叙述を利用していることは明白であるが、彼はこの戦いにカール・マルテルも参加していたとの情報を付加している。なぜこのような事実と異なる情報が付加されてしまったのだろうか。こうした問いに答えるには、パウルスが執筆を行った時の状況や彼が用いた情報源を考察する必要がある。

パウルス・ディアコヌスは780年代にフランク宮廷に滞在しており、『ランゴバルド人の歴史』にはそこで得た情報も反映されているというのが通説である。マキタリックは、パウルス・ディアコヌスが用いている情報源の多くがシャルルマーニュ宮廷で手に入るものであったことを指摘し、そうした例としてベーダの『イングランド人の教会史』、『教皇の書』、トゥールのグレゴリウス『歴史十巻』、『フレデガリウス年代記続編』をあげている⁴⁰⁾。他方でシュヴァルツは、両史料の比較から、パウルスが『フレデガリウス年代記』（およびその続編）を直接用いていた痕跡はないと結論している⁴¹⁾。ここで両者の説のいずれが正しいのかについて、確定的な結論を下すことは差し控えるが、パウルスの叙述に『続編』に見られるトゥール・ボワティエ間の戦いの情報が一切反映されていないことは確実に指摘できる。おそらくパウルスは、『続編』以外のなんらかの情報源から、カール・マルテルがかつてウッドとともにサラセン人と戦っていたということを知ったのであろう。こうした情報が、フランク宮廷において口頭で伝承されていたものなのか、何らかの形で文字化されていたものだったのかは今となっては分からない。いずれにしても、パウルスは、そうした（実際にはトゥール・ボワティエ間の戦いについての）情報と『教皇の書』に記載されている721年の戦いに関する情報を結びつけてしまい、2つの戦いを混同したかのような叙述が生まれたのであろう⁴²⁾。彼が『ランゴバルド人の歴史』において頻繁に利用している『教皇の書』⁴³⁾にトゥール・ボワティエ間の戦いへの言及がないこと、この部分以外に『ラ

38) この史料については Levison and Löwe (eds.), *Deutschlands Geschichtsquellen im Mittelalter. Vorzeit und Karolinger II*, pp. 221–224; McKitterick, *History and Memory*, pp. 60–83; W. E. Schwarz (ed. and trans.) *Paulus Diaconus, Geschichte der Langobarden. Historia Langobardorum*, Darmstadt, 2009, pp. 23–111. 一般にこの史料は、パウルスがフランク宮廷への滞在を終え、晩年をモンテ・カシノ修道院で過ごした時期に成立したと考えられてきたが、マキタリックは780年代中頃に北イタリアのフランク宮廷との結びつきのなかで執筆されたとの説を提示している。

39) Schwarz (ed. and trans.) *Paulus Diaconus, Geschichte der Langobarden*, 6–46, pp. 330f. : *Eo tempore gens sarracenorum in loco, qui Septem dicitur, ex Africa transfretantes universam Hispaniam invaserunt. Deinde post decem annos cum uxoribus et parvulis venientes Aquitaniam, Galliae provinciam, quasi habitaturi ingressi sunt. Carolus siquidem cum Eudone, Aquitaniae principe, tunc discordiam habebat. Qui tamen in unum se coniungentes contra eosdem Sarracenos pari consilio dimicarunt. Nam irruentes Franci super eos trecenta septuaginta quinque milia Sarracenorum interemerunt ; ex Francorum vero parte mille et quingenti tantum ibi ceciderunt. Eudo quoque cum suis super eorum castra irruens, pari modo multos interficiens omnia devastavit.*

40) McKitterick, *History and Memory*, pp. 74f.

41) Schwarz (ed. and trans.) *Paulus Diaconus, Geschichte der Langobarden*, pp. 49–51.

『ランゴバルド人の歴史』にトゥール・ポワティエ間の戦いについての記述が見られないこともこうした推測を補強する⁴⁴⁾。確かに、『ランゴバルド人の歴史』がカロリング家を賞賛する傾向をもつ史料であることを考えるなら⁴⁵⁾、『教皇の書』に書かれている721年の戦いにカール・マルテルが参加していなかったことを知りつつ、ウードの手柄をいわば横取りさせる形で、カールの関与をパウルスが挿入したという可能性も排除すべきではないのかもしれない。しかし、パウルスの意図がどのようなものであったにしても、『ランゴバルド人の歴史』の記述を見る限りでは、彼がフランク人とイスラーム勢力の一連の戦いについて、十分な情報を持っていなかったということは間違いない。そもそもカール・マルテルを賞賛したいのであれば、『教皇の書』に基づいて721年の戦いに言及するだけでなく、トゥール・ポワティエ間の戦いをも別個に記述し、彼の勝利をたたえるのが自然な態度であろう。『ランゴバルド人の歴史』中にこうした叙述が見られないという事実は、トゥール・ポワティエ間の戦いについてのパウルスの情報源が、「カール・マルテルがかつてウードとともにサラセン人に勝利した」という内容のなんらかの伝承のみであったということを示唆している。『教皇の書』で描かれている戦いにカール・マルテルも参加させる形の記述が生じた背景には、こうした状況下で起こった2つの戦いの混同があったと考えられるのである。

また、パウルス・ディアコヌスが『教皇の書』の記述に、「(サラセン人が) 妻や子供とともに…そこに居住するために」到来したとの記載を加えていることも注目に値する。サラセン人の遠征がフランク王国の征服を目的とするものであったとの印象を生み出すこうした筆致は、本稿第1章で紹介した8世紀前半のフランク史料には一切見られなかったものなのである⁴⁶⁾。こうした

42) 仮にパウルスが『フレデガリウス年代記続編』を知っていたとしても、そこには721年の戦いへの言及が見られないため、『教皇の書』で言及されている戦いと『続編』が伝える戦いが同一のものを指すと誤解してしまう可能性はなくなる。なお、F. D. Foulke, *Paul the Deacon. History of the Langobards*, Philadelphia, 1907, pp. 287f. n. 3 や S nac, *Charlemagne et Mahomet*, pp. 72f. は、カール・マルテルへの言及を根拠にパウルスが『ランゴバルド人の歴史』で記述しているのはトゥール・ポワティエ間の戦いであると主張するが、彼が2つの戦いを混同している可能性を考えるなら、この記述がどちらの戦いを指すのかを議論することに意味があるとは思われない。

43) 『教皇の書』が『ランゴバルド人の歴史』の重要な情報源の1つであることについては、Schwarz (ed. and trans.) *Paulus Diaconus, Geschichte der Langobarden*, p. 51.

44) なお、『ランゴバルド人の歴史』では、737年ナルボンヌ近郊での戦いも言及されている、Schwarz (ed. and trans.) *Paulus Diaconus, Geschichte der Langobarden*, 6-54, pp. 336f. この部分では、カール・マルテルが「サラセン人」を撃退したとの記述に続いて、再度「サラセン人」が侵入してきたこと、ランゴバルド王リウトブランドがカールの要請に応じて軍を出し、戦わずして「サラセン人」を撤退させたことが描かれている。イスラーム勢力がこの時期2度にわたってフランクに侵入してきたとの情報は、他の史料には現れないため、MGH版の編者ヴァイツは2度目の侵入に関する記述の信憑性を疑っている、G. Waitz (ed.), *Pauli Historia Langobardorum. MGH Scriptorum rerum Germanicarum in usum scholarum separatim editi 48*, Hannover, 1878, p. 238, n. 2. この部分の記述に関するパウルスの情報源は明らかになっていないが、ランゴバルド王によるサラセン人撃退が記載されていることから、パウルスがイタリアに伝わっていた何らかの史料を用いてこの部分を執筆した可能性も考えられよう。

45) パウルスが、『ランゴバルド人の歴史』の読者として、ベネヴェント宮廷のランゴバルド人のみならず、フランク人をも念頭に置いていたことも指摘されている、McKitterick, *History and Memory*, pp. 67-77; Schwarz (ed. and trans.) *Paulus Diaconus, Geschichte der Langobarden*, p. 32. 事実この作品は、イタリアを超えて、フランク王国内にも広く伝播したことが知られている、McKitterick, *History and Memory*, pp. 77-83.

「征服者としてのサラセン人」というイメージを初めて打ち出したラテン語史料は、『教皇の書』グレゴリウス2世伝の750年代（または40年代？）に修正された版である。そこには、上で引用した同時代版の記載に、「（ハガル人は）フランキアを占拠するため、ローヌ川を渡ろうと試みた」との文言が付加されているのである⁴⁷⁾。従って、イタリアにおいては比較的早い段階で、「サラセン人＝征服者」というイメージが現れていたことが推測できるといって良いだろう。他方で、パウルス・ディアコヌスが用いているグレゴリウス2世伝は先に引用した同時代版であるため、彼がこうしたイメージをどこから得たのかははっきりとは分からない。イタリア滞在中にこうした「サラセン人」イメージに触れていた可能性や、彼が滞在した8世紀後半のフランク宮廷においても、ムハンマド以来のイスラーム勢力の大征服についての情報が流入してきており、「サラセン人＝征服者」というイメージが定着していた可能性を想定すべきであろう⁴⁸⁾。

パウルスはフランク滞在中の780年代に執筆した『メッス司教事績録』において、カール・マルテルについて以下のように述べている。「もっとも強いものと戦うことになる人物で、彼が行った大規模な戦いのなかでも、とりわけサラセン人を打ち破ったため、このどう猛で不実な民は、現在までフランク人の軍を恐れるようになった」⁴⁹⁾。この時期のフランク宮廷においては、カール・マルテルといえばサラセン人を打ち破った闘士であるというイメージがすでに定着していたと考えて良いであろう。『ランゴバルド人の歴史』ではこうしたイメージに、「フランク王国を征服しようとしたサラセン人」という要素も付け加えられることとなる。そして、そもそもはアキテーヌ公ウードの教皇宛て書簡に由来するであろう誇張された数字をも伴いながら、「征服者たるサラセン人に大勝したカール・マルテル」という、我々にもなじみ深い形のイメージが形成されていったのである。

その後、『ランゴバルド人の歴史』に見られる叙述は、732年のトゥール・ボワティエ間の戦いを描いたものとして、中世を通じて広められていくこととなる。カロリング末期のプリュム修道院長レギノ（†915年）による『年代記』は、『ランゴバルド人の歴史』のこの部分の文言をほぼ逐語的に引用している⁵⁰⁾。他方で、ウードがイスラーム勢力を撃退した721年トゥールーズの戦いは、『フレデガリウス年代記続編』が言及しないことに加え、『ランゴバルド人の歴史』においてトゥール・ボワティエ間の戦いと混同されたことにより、徐々に忘れられていく。9世紀前半

46) こうした変化は、従来の研究において全く注目を集めてこなかったといつて良い。Micheau and Sénac, *La bataille Poitiers*, pp. 11f. では、13世紀の『フランス大年代記』において、トゥール・ボワティエ間の戦いのイメージが征服軍の撃退に変わっていることが指摘されているが、以下の議論が明らかにするように、こうした変化はすでに8世紀後半に生じていた。

47) Duchesne, *Le Liber Pontificalis*, c. 8, p. 401, ll. 10f: [...] *Rodanum conabantur fluvium transire, Francias occupandum [...]*. なお、ここで「ローヌ川」への言及があらわれることについては、Rotter, *Abendland und Sarazenen*, pp. 215f. 実際にイスラーム軍がローヌ川方向に狙いを定めるのは、725年以降のことであり、ここで叙述されている721年の状況には合致しない。

48) シャルルマーニュとハールーン・アッ・ラシードの有名なやりとりは790年代末以降のことであるが、小ピピンも760年代にバグダードのカリフ、マンスールと使節を交換している。カロリング君主とアッバース朝の交流については、M. Borgolte, *Der Gesandtenaustausch der Karolinger mit den Abbasiden und mit den Patriarchen von Jerusalem*, München, 1976.

49) G. H. Pertz (ed.), *Scriptores rerum Sangallensium. Annales, chronica et historiae aevi Carolini. MGH Scriptores 2*, Hannover, 1829, p. 265, ll. 5-8: [...] *viris omnino fortissimis conferendum, qui inter cetera et magna bella quae gessit, ita praecipue Sarracenos detrivit, ut usque hodie gens illa truculenta et perfida Francorum arma formidet.*

に成立した『カール大帝伝』では、「カールは、…ガリアを占領しようとしたサラセン人を二度の激戦で、つまり一度はアキテーヌ地方のポワティエの町において、二度目はナルボンヌの近くのペール川において打ち破りスペインに退却を余儀なくさせた」⁵¹⁾と述べられており、「征服者たるサラセン人に大勝したカール・マルテル」というイメージが完全に定着していることが分かる。他方で、この史料中で、721年のトゥールーズの戦いは一切言及されていない。そして、『カール大帝伝』も『ランゴバルド人の歴史』と並んで、中世を通じて広く読まれた史料であるため、この記述も後のカール・マルテル像に決定的な影響を与えていくこととなるのである。

第3章 8世紀の西欧におけるイスラーム認識とその変容

これまでの考察により、現代の我々にもなじみ深い「征服者たるサラセン人に大勝したカール・マルテル」というイメージは、パウルス・ディアコヌスの『ランゴバルド人の歴史』によって確定的なものとなったことが明らかになった。また、パウルスの記述には、8世紀末のフランク宮廷において広まっていたカール・マルテル像が反映されている可能性が高いこともまた指摘された。

しかしながら、より同時代に近い『フレデガリウス年代記続編』に見られるカール・マルテル像は全く異なるものである。第1章で見たように、トゥール・ポワティエ間の戦いの叙述では、カールの倒した相手は、「フランク王国征服を目指す一大勢力」などではなく、「ウードが（キリスト教徒としてはあるまじきことに）カールにけしかけた異教徒」として描かれている⁵²⁾。この部分の叙述におけるカール・マルテルの敵役は、あくまでもアキテーヌ公ウードなのである。

『続編』が一貫してカール・マルテルを賞賛する史料であることを考えるなら、この点はさらに不可解なものとなる。なぜ、『続編』の著者は、『ランゴバルド人の歴史』のように、さらにはギボンのように叙述を行わなかったのだろうか。カール・マルテルの功績をプロパガンダ的に称揚したいなら、「登場から100年足らずの間に大征服を成し遂げ、いまやヨーロッパにまで迫ってきたイスラーム勢力に敢然と立ち向かったカール・マルテルは、最終的に彼らを追い出し、ヨーロッパをイスラーム化から守ったのである」と述べれば良かったのではないだろうか。仮に実際のイスラーム勢力の意図が単なる略奪遠征に過ぎず、相手の軍がそれほど大規模なものではなかったとしても、敵はフランク王国にとってきわめて重要な意義を持つ、聖マルティヌスの聖堂に狙いを定めていたのである。当時の世界情勢を知る我々の目から見ると、トゥール・ポワティエ間

50) F. Kurze, *Reginonis abbatis pruniensis Chronicon cum continuatione treverensi*. MGH *Scriptores rerum germanicarum in usum scholarum separatim editi* 50, Hannover, 1890, pp. 36f. その他の中世の歴史叙述における受容については Nonn, *Die Schlacht bei Poitiers 732*, pp. 47-49.

51) O. Holder-Egger (ed.), *Einhardi vita Karoli magni*. MGH *Scriptores rerum Germanicarum in usum scholarum separatim editi* 25, Hannover, 1911, c. 2, p. 4, ll. 5-10: *Karolus [...] Sarracenos Galliam occupare temptantes duobus magnis proeliis, uno in Aquitania apud Pictaviium civitatem, altero iuxta Narbonam apud Birram fluvium, ita devicit, ut in Hispaniam eos redire compelleret [...]*; エインハルドゥス・ノトケルス、國原吉之助（訳・註）『カロルス大帝伝』筑摩書房、1988年、第2章、9頁（上の引用では固有名詞の表記のみ改編）。

52) 敵対勢力が異教徒と手を組んでいることを非難するこうした叙述は、9世紀のフランク史料にも頻繁に現れるものである。例えば、サンベルタン年代記の841年の記述では、ロタールがノルマン人と手を組んだことが非難されている、G. Waitz (ed.), *Annales Bertiniani*, MGH *Scriptores rerum Germanicarum in usum scholarum separatim editi* 5, Hannover, 1883, p. 26.

の戦いで勝利は、『続編』の著者にとって、カール・マルテルやカロリング家の功績を大々的に宣伝する格好のチャンスであったように見える。

ところが、我々の期待に反し、『続編』が伝えるカール・マルテル像は全く異なっている。そもそも、『続編』中のカール・マルテルは、アキテーヌ公を始め、フリーセン人、ザクセン人など全方位の敵対勢力を次々と打ち破っていく姿で描かれており、「サラセン人」との戦いは、カールが行った数ある戦争のなかの1つとしての位置づけしか与えられていない。こうした筆致の背景にあるのは、『続編』の著者が持っていたイスラーム勢力についての情報不足であると思われる。そして『続編』がカロリング家と密接に結びついた環境下でまとめられた史料であることを考えるなら、こうした状況がカール・マルテル本人やその周辺においてもさほど変わらなかったであろうこともまた推測できる。以下では、従来のトゥール・ポワティエ間の戦いに関する考察において、ほとんど考慮されることがなかったカール・マルテル時代の西欧におけるイスラーム認識、とりわけカール・マルテル周辺における認識について、さらなる考察を行ってみたい。

さて、これまでに引用したラテン語史料において、イスラーム教徒は「サラセン人」、「イシュマエル人」、「ハガル人」などと呼ばれていた。これらはすべて旧約聖書に由来する概念で、それぞれサラ、イシュマエル、ハガルの子孫を総称する呼び名であると理解されていて、特定の宗教や政体への帰属を含意する概念ではない。イスラーム登場以前から、キリスト教世界では非キリスト教徒である砂漠の民が「サラセン人」・「イシュマエル人」・「ハガル人」と呼び表されており、これらの概念は基本的に同義であると理解されていた⁵³⁾。では、カール・マルテル時代の西欧において、「サラセン人」はどのような存在であるとみなされていたのだろうか。

ゲッツは近年、イスラーム勢力の7世紀から8世紀にかけての大征服についての情報が、十字軍以前の西欧の史料にほとんど現れないということを指摘している⁵⁴⁾。他方で彼は、イスラームの拡大に対する情報が皆無ではなかったということも強調しており、その例として『フレデガリウス年代記』、『ランゴバルド人の歴史』、プリュムのレギノの『年代記』、ヴィエンヌ司教アド（†874年）の『年代記』をあげている。また、『モサラベ年代記』等アンダルスで成立した史料中に、比較的詳細な情報が含まれているということも併せて指摘されている。しかしゲッツは十字軍以前の時代を一括して扱っているため、彼の叙述からは西欧内部におけるイスラーム認識の変化は浮かび上がってこない。だが、この変化こそが、本稿にとって重要なのである。

53) これらの概念については、Rotter, *Abendland und Sarazenen*, pp. 253f.; Tolan, *Saracens*, pp. 3-20; 櫻井康人「4-13世紀の聖地巡礼記に見るイスラーム・ムスリム観の変遷」、『ヨーロッパ文化史研究』第9号、2008年、47-88頁。同書49-58頁には、初期中世の聖地巡礼記に見られるイスラーム認識がまとめられている。他方で、こうした聖地巡礼記の記述は、本稿が対象とした8世紀のフランク王国の歴史叙述には、全く影響を与えていない。

54) Goetz, *Die Wahrnehmung anderer Religionen*, pp. 316-330。ただしゲッツは言及していないものの、この点における重要な例外としてベダの存在をあげることができる。第1章で言及した『教会史』におけるガリア侵入の記述はきわめて曖昧なものにとどまっているが、『年代記』にはビザンツと「サラセン人」の戦いや、シチリアやサルディーニャへの攻撃、アフリカの征服への言及が見られる。Tolan, *Saracens*, pp. 72-78。また、アイオナ修道院長アダムナンの手による聖地巡礼記をベースにした『聖地について』*De locis sanctis*には、サラセン人の首都たるダマスカスおよびその君主ムアーウィヤも言及されている。ベダのイスラーム認識については、Rotter, *Abendland und Sarazenen*, pp. 231-264に詳しい。

7世紀中頃までに成立していたと考えられる『フレデガリウス年代記』には、ビザンツ帝国の情勢が頻繁に描かれており、第4巻第66章には「サラセン人とも呼ばれるハガル人」とヘラクレイオス帝（位610-641年）の戦いが、同第81章にはコンスタンス2世（位641-668年）時代のイスラーム勢力によるエルサレム、エジプト、アフリカ征服がそれぞれ描かれている⁵⁵⁾。『フレデガリウス年代記』の成立事情については長い議論があるものの、現在我々に伝わっている形でまとまったのは7世紀中頃であると考えられており⁵⁶⁾、この時期のフランク王国には、当時の周辺世界の情勢について、一定の情報が存在していたとの推測が可能であろう。

他方で、『フレデガリウス年代記』以降の時代をカバーする史料となる『フランク人の史書』や『フレデガリウス年代記続編』では、叙述の視野はきわめて狭いものとなる。フランク外の情勢が全く記載されなくなるのである。『続編』で「サラセン人」が登場するのは、フランク領内に侵入してきた場合に限られているし、彼らが「短期間で大征服を成し遂げたイスラーム帝国の先兵」のように描かれないのはすでに見たとおりである。ここには『フレデガリウス年代記』第4巻に見られる「サラセン人」情報は全く反映されていないのである。『続編』の成立事情については議論が続いている状況であり最終的な結論は下せないものの、『続編』におけるカール・マルテルと「サラセン人」の戦いの部分を執筆した人物は、『フレデガリウス年代記』第4巻を読んでいなかった可能性が高い。または、その部分を読んでいたとしても、カール・マルテルが打ち破った「サラセン人」と、ビザンツに侵入してきた「サラセン人」が同一の政体に属する大集団であるとの認識に至らなかった可能性もあろう⁵⁷⁾。そして、『続編』がカール・マルテル周辺で成立した史料であることを考えるならば、カール・マルテル宮廷におけるイスラーム認識も『続編』に見られるものと大きく変わらなかったと推測出来る。

他方、フランク王国南部で成立した『モワサク年代記』には、北アフリカから到来した「サラセン人」が短期間で西ゴート王国全土を支配下に置いたとの情報が見られ、その後の「サラセン人」のフランク南部への攻撃についても比較的詳しい情報が見られるため、「サラセン人」の政体についての情報がフランク王国内で全く知られていなかったわけではないだろう。しかし、アウストラシアで成立した『続編』には、ダマスクスのカリフやアンダルス総督の事実上の上司に当たるイフリキヤ総督の存在への言及が一切見られないだけでなく、アンダルス内部の情勢についての情報も全く現れず、当然西ゴート征服への言及も見られない。これは『フレデガリウス年代記』で西ゴート王国の情勢が多数描かれているのとは対照的である。また、『続編』でも

55) Krusch, *Fredegarii et aliorum chronica*, 4-66, pp. 153f., c. 4-81, p. 162. この史料の執筆者がフランク宮廷や周辺世界の情勢に精通していたことについては、S. Esders, Herakleios, Dagobert und die „beschnittenen Völker“. Die Umwälzungen des Mittelmeerraums im 7. Jahrhundert in der Chronik des sog. Fredegar, A. Goltz, H. Leppin and H. Schlange-Schöningen (eds.) *Jenseits der Grenzen: Beiträge zur spätantiken und frühmittelalterlichen Geschichtsschreibung*, Berlin - Boston, 2009, pp. 240-309.

56) この史料の成立事情をめぐる議論については、岡地稔・杉浦武仁「『フレデガリウス年代記』研究1」、『アカデミア』人文・自然科学編第5号、2013年、103-113頁。

57) いずれにしても、『続編』を現在我々に伝わっている形の全3巻構成にまとめなおす作業を行った人物は、「サラセン人」とビザンツの戦いを記述した『年代記』本体部分の叙述を目にすることができる状況にあった、Collins, *Die Fredegar-Chroniken*, pp. 82-89. そうした作業は伯キルデブラントの元で751年頃に、またはその息子ニーベルングのもとで768年以降のある時期に行われたと考えて良いだろう。カール・マルテルと「サラセン人」の戦いの部分を描いた人物と、全体の再構成作業を行った人物は異なる可能性が高いが、後者は前者の執筆部分に手を加えることはなかった様子である。

『モワサック年代記』でも、フランク領内への攻撃を指揮したアンダルス総督は「王」*rex*と表記されている。こうした史料の執筆者が「王」*rex*なる語にどのような意味内容を込めたのかははっきりしないものの⁵⁸⁾、イスラーム世界内部の情勢に大きな関心が払われていないことは確実である。『続編』中の「サラセン人」は、ワードの手引きによって突如フランク領内に現れ、何度かの戦いでカールに敗れた後、叙述から姿を消していくのである。

この時代の「サラセン人」が、ダマスクスのカリフを頂点とした大帝國を構成する民としてではなく、西方キリスト教世界周辺に存在する多数の異教徒集団の1つとして認識されていたことは、すでに多くの研究者が指摘するとおりである⁵⁹⁾。例えば教皇ザカリアスは、745年にポニファティウスに宛てた書簡において、教会に降りかかっている災いとして「サラセン人、ザクセン人、フリーセン人」をあげている⁶⁰⁾。また、「サラセン人」はキリスト教徒の墮落を罰するための神の鞭であるという認識も頻繁にあらわれる。746-747年頃に聖ポニファティウスがマーシア王エセルバルドに宛てた書簡では、人々の墮落故にスペイン、プロヴァンス、ブルグンド人がサラセン人に襲われたということが述べられている⁶¹⁾、『モワサック年代記』もサラセン人による西ゴート王国滅亡の理由を王ウイティザの放蕩に帰しているのである⁶²⁾。キリスト教徒を攻撃する異教徒集団を「神の鞭」として描くやり方は、古代末期以来の伝統でもあり、「サラセン人」もこの枠組みのなかで理解され続けたのであった。

こうしたことを踏まえるなら、『続編』執筆者がカール・マルテルを賞賛する際、その敵対者としてアキテーヌ公ワードの存在を強調していることも理解できよう。「サラセン人」はトゥール・ポワティエでのカールの功績を強調するための敵役にふさわしいとはみなされなかったのである。彼らに与えられた役回りは、ザクセン人・フリーセン人といった他の異教徒らと並んで、カール・マルテルに打ち倒される異教徒集団の1つというものに過ぎなかった。

それに対して、パウルス・ディアコヌスが滞在した8世紀末のフランク宮廷では、こうした認識は大きく変化していた。アキテーヌ公領は768年に廃止され、アキテーヌ公はカロリング家にとって脅威をもたらす存在ではなくなっていた。その一方で、フランク王国ではローマやビザンツとの外交活動が活発化しており、「サラセン人」君主との使節の交換すらも行われていた⁶³⁾。この時期には、いわゆる「カロリング・ルネサンス」の動きのなかで、フランク宮廷には王国内

58) 『続編』が737年のナルボンヌの戦いを描く部分では、ナルボンヌを任されていたユースフ・ブン・アブド・アッ・ラフマーンを「サラセン人の王」と呼びつつも、援軍を率いて到着したアンダルス総督ウマル・ブン・ハーリドをも「別の王」と呼んでおり、明確な定義を行うことなく「軍事指導者」や「有力者」といった意味で「王」*rex*という語が用いられている様子がうかがえる、Krusch, *Fredegarii et aliorum chronica*, c. 20, pp. 177f. Rotter, *Abendland und Sarazenen*, pp. 238f. は、「王」という語を用いることで、カールの功績を水増しする意図があった可能性も指摘している。

59) Rotter, *Abendland und Sarazenen*, p. 230, pp. 257f.; Tolan, *Saracens*, pp. 77f. 「サラセン人」がイスラームという1つの宗教を通じて結びついた集団であるという認識は、十字軍以前の西欧には基本的に現れない、Goetz, *Die Wahrnehmung anderer Religionen*, pp. 262-293.

60) M. Tangl (ed.), *Die Briefe des heiligen Bonifatius und Lullus. MGH Epistolae selectae 1*, Berlin, 1916, no. 60, p. 123, ll. 7-10.

61) *Ibid.*, no. 73, p. 151, ll. 24f.

62) Pertz (ed.), *Annales et chronica aevi Carolini*, p. 290; Kettmann, *Subsidia Anianensia*, p. 16. なお、先に挙げた『フレデガリウス年代記』でも、ヘラクレイオス帝を破った「サラセン人=ハガル人」は「神の剣」とも呼ばれている。

外の知識人が呼び集められてもいた。こうした状況を見れば、8世紀末のフランク宮廷において、サラセン人が他の異教徒とは一線を画す存在であるとの認識が生じていたことは推測に難くない。パウルス・ディアコヌスの『ランゴバルド人の歴史』に見られる「フランク征服をもくろむサラセン人に大勝したカール・マルテル」像には、こうした認識の変化が反映しているのであろう。パウルスの想定した読者でもあったこの時代のフランク宮廷人にとって、「サラセン人」はカール・マルテルの敵役にふさわしい、フランク王国侵略をもくろみ侵入してきた一大勢力であった。もちろんイタリア出身であるパウルス自身、フランク宮廷に滞在する以前から「サラセン人」について一定の情報を持っていた可能性も高い。そこに、同時代史料の不足やパウルス自身の誤解も介在するなかで、我々にもなじみ深いトゥール・ポワティエ間の戦いのイメージが形成され、広められていったのであった。

おわりに

西欧初中世史を扱う研究において、フランク王国が西ユーラシア世界における1つの重要なアクターであることはこれまで全く疑われてこなかったとあって良い。ところが、8世紀前半の史料が示唆する状況は、周辺世界の情報から隔離されたフランク王国というものであった。トゥール・ポワティエ間の戦いの段階では、カール・マルテルは自分の戦っている相手が、ダマスカスに首都を置く世界帝国に属していたということを全く認識できていなかった可能性が高い。当時のフランク王国から残されている史料はフランク内部、それどころかカール・マルテル周辺のきわめて狭い世界にしか目配りをしていないのである。また、フランクにおいて西ユーラシア世界全体の動向がほとんど知られていなかっただけでなく、フランク外においても、フランク王国への関心はさほど高くはなかったことを想定しなくてはならない。例えば、『モサラベ年代記』に「フランク人」が現れるのは、アンダルスのイスラーム勢力がピレネーを越えて遠征を行うときのみである。このことは、この年代記で、アンダルス内部だけでなく、中東やビザンツ、北アフリカの情勢が比較的詳細に描かれているのとは対照的である。キリスト教徒である『モサラベ年代記』の著者にとっても、フランク王国内部の動向は大きな関心と呼ばなかったのである。ローマで成立した『教皇の書』においても、8世紀前半のフランク王国への関心はさほど高くない。721年のトゥールーズの戦いへの言及からは、アキテーヌ公と教皇が何らかの形で接触していたことが読み取れるものの、アキテーヌ公の書簡がきっかけになったであろうこうした例外を除くと、カール・マルテルの「サラセン人」への一連の勝利のみならず、フランク王国内部の情勢はこの史料中では全く言及されないのである⁶⁴⁾。

63) 上述の註48を参照。768年、小ピピンが送っておいた使節に答える形で、「サラセン人の王アモルムニ」(アッバース朝のカリフ、マンスールのこと)が贈り物とともに使節を派遣してきたことを伝えるのは、他ならぬ『フレデガリウス年代記続編』である、Krusch, *Fredegarii et aliorum chronica*, c. 51, p. 191. 比較的簡潔なこの部分の叙述から執筆者の「サラセン人」認識を正確に読み取ることは困難であるが、カール・マルテルとの戦いのなかで「サラセン人」が描かれる場合は全く異なり、彼らが異教徒であることを示唆する文言は現れない。この記述は我々が持つフランク君主とカリフの接触についての初めての情報に当たる。

64) Gantner, *Freunde Roms*, pp. 219-228 は、この時期の教皇権が同盟相手としてカロリング家だけを念頭に置いていたわけではなく、全方位外交を展開していたということを強調している。『教皇の書』にフランク王国・カロリング家への言及が現れ始めるのは、ステファヌス2世(位752-757年)の伝記以降である。

他方で、トゥール・ポワティエ間の戦いをはじめとするカール・マルテルの対イスラーム戦争の戦果が過度に強調されていく過程からは、8世紀後半のフランクにおいて、西ユーラシア世界の動向についての知識が飛躍的に増大していることが読み取れる。外部との交流が活発化し、特にローマとの結びつきが強化されていくなかで、フランク王国は再び西ユーラシア世界におけるプレゼンスを増していったのであろう。こうした変化をもたらしたのは、カロリング家の王権が相対的に安定してきたというフランク内部の要因だけではないだろう。聖画像論争が勃発し、教皇権はビザンツと距離を置き始め、ランゴバルドはラヴェンナを占領して教皇領への圧力をさらに強め、中東ではアッバース朝が成立し、イベリア半島には後ウマイヤ朝が生まれていた。本稿の知見の持つ意義は、こうした西ユーラシア世界全体の動きのなかでさらに考察を深める必要がある⁶⁵⁾。また、本稿において分析の対象となったのは、主としてカロリング家を中心とするフランク宮廷における対外認識のみであった。宮廷周辺を超えた西欧世界の人びとにおける対外認識を考えるためには、近年研究の進展がめざましい、西欧と周辺世界との間の経済的な交流についても考察対象に含める必要がある⁶⁶⁾。これらの作業は本稿のかざられた紙幅のなかで行える範囲を大きく超えるものといえよう。

(愛知県立大学非常勤講師)

[付記] 本研究はJSPS 科研費 15K16863 の助成を受けたものである。

-
- 65) 本稿の分析の成果は基本的にフランク王国に軸足を置いたラテン語史料のみに基づく調査結果に過ぎない。当時の世界情勢を総合的に把握するためにはギリシャ語・アラビア語史料をも用いた考察が不可欠となるが、こうした作業はフランク王国史を専門とする筆者一人の力で成し遂げられるものではない。研究の精緻化が進む昨今の状況を考えれば、今後はさまざまな分野を専門とする研究者らを交えて議論を深めていくことが必要であると思われる。本小論は、そうした今後の議論を惹起するための出発点として位置づけられるべきものである。なお、8-9世紀の西ユーラシア世界全体を視野に入れた研究としては、渡辺金一「8-9世紀初頭のビザンツ帝国とフランク王国」、『岩波講座世界歴史中世1』岩波書店、1969年、153-181頁；大月康弘「ピレンヌ・テーゼとビザンツ帝国——コンスタンティノープル・ローマ・フランク関係の変容を中心に——」、『岩波講座世界歴史7ヨーロッパの誕生4-10世紀』岩波書店、1998年、213-240頁；五十嵐修『王国・教会・帝国——カール大帝期の王権と国家』知泉書館、2010年があり、それらにおいては欧米の研究動向をも知ることが出来るが、叙述は8世紀中頃以降に集中している。
- 66) 近年の研究は、イスラーム貨幣の出土状況などをもとに、バグダードを中心として、西欧世界をも包含する巨大な経済圏が生まれていたことを強調している、佐藤彰一『中世世界とは何か』岩波書店、2008年、14-17頁；佐藤彰一『カール大帝』山川出版社、2013年、89-94頁；小澤実「キエフ・ルーシ形成期の北西ユーラシア世界とスカンディナヴィア——ルーン石碑の検討を中心に」、小澤実・長縄宣博編『北西ユーラシアの歴史空間——前近代ロシアと周辺世界』北海道大学出版会、2016年、75-103頁、81頁図2。また、ライン地方の刀剣工房がイスラーム世界を顧客として生産を行っていたという興味深い事実も指摘されている、佐藤彰一『カール大帝』、64-65頁。本稿の知見に照らして重要なのは、こうした西欧世界と東方世界との経済的交流の痕跡が大規模に現れ始めるのが、カール・マルテルの活躍した時代ではなく、8世紀後半以降であるという点である。